

# 生活の中の防災を発見する防災教育

## ——泉大津市におけるワークショップ——

城 下 英 行                      藤 野 華 世

要 旨：防災教育分野においては、防災に取り組む市民一人ひとりの主体性が重要であると言われてしている。しかし、一般的な防災教育のスタイル、すなわち規範的な対策として確立している防災対策を伝達し、その取り組みを促進するといった取り組みだけでは、主体的な防災を実現することには繋がり得ない可能性がある。そこで、規範的な防災対策のオルタナティブとして、生活の中に存在する防災に着目した。それはすなわち、何らかの防災対策の新規実施を目指すのではなく、生活の中にあるがゆえに気づかぬうちに実施している防災を見出すような防災教育のアプローチとも言える。本稿では、大阪府泉大津市において実施した生活の中の防災を見出すためのワークショップの結果について詳述し、生活の中の防災を発見するための防災教育の可能性とその意義について議論する。

キーワード：防災教育、ワークショップ、未知・実施済、ネパール、泉大津市

### 1. はじめに

防災教育分野においては、防災に取り組む市民一人ひとりの主体性が重要であると言われており、市民の主体性を高めることを標榜した取り組みが散見される。しかしながら、フーコーの監獄のメタファに見られるように、教育をする側にとって望ましいとされる学習者が必ずしも主体的であるとは限らない。むしろ、与えられた環境を維持するために自分自身を律し、自由を手放しているという点では、主体的とされる状態の対極にあるような状態とも理解できる。このように考えるならば、現在、規範的な防災対策として確立している対策を伝達し、その取り組みを促進するような防災教育だけでは、主体的な防災を実現することには繋がり得ない可能性がある。筆者は発展途上国であるネパールを訪問することによってこうした思いを強くしてきた。現地では、そもそも規範的な防災対策に取り組むことが困難な人が多数いるためである。

そこで本稿では、規範的な防災対策のオルタナティブとして、生活の中に存在する防災に着目した。それはすなわち、何らかの防災対策の新たな実施を目指すのではなく、生活の中にあるがゆえに気づかぬうちに実施している防災を見出すような防災教育のアプローチとも言える。既に生活の中にあるのであれば、わざわざ見出す必要などないと思われるかも知れない。しかし、こうした生活の中の防災は失われやすいものであり、失われないようにするためには表出化することが肝要である。そしてその表出化の過程が防災の学びとなる。以下では、まず、ネパールと日本を取り上げ、

それぞれの国において生活の中にある防災を見出す意義について述べる。その上で大阪府泉大津市において実施した生活の中の防災を見出すためのワークショップの結果を詳述し、生活の中の防災を発見するための防災教育の可能性とその意義について議論する。

## 2. ネパールにおける防災に学ぶこと

筆頭著者は、2007年にネパール国<sup>1)</sup>を初めて訪れてから、毎年のように同国を訪問し、防災実践や調査を行ってきた。例えば、カトマンズ郊外のダハチョーク地区<sup>2)</sup>においては、2009年に学校関係者や生徒等に対する質問紙調査を実施した他、2013年には住民が雨量観測を行って土砂災害に備えることを目的に、簡易雨量計を制作するためのワークショップを開催した。途上国でも継続的に防災活動を実施できるように、現地で入手可能な安価な素材で簡易雨量計の制作を行った。そもそもこうした取り組みを現地で実施することとなったのは、ダハチョーク地区ではODAで支援された雨量計が小学校に、警報装置が集落に設置されていたが、特段の活用がなされておらず、警報装置については故障したまま修理されていない状況であることを2007年に同地区を初訪問した際に学校関係者から聞いたためである。「大学人」という肩書きで途上国に「調査」という名目で訪問すると、さまざまな方からさまざまな意見が寄せられる。それらの意見の一部を取り上げて、ODAを批判することも、また、無批判に礼賛することもいずれも望ましい姿勢とは言えないだろう。筆者のような外部者が当事者と関わりをもつことをポジティブな機会とするためには、現状を吟味、批判することのみならず、当事者とともにベターメントに向けた実践を行うことが重要と言える。こうした思想の元で、いかなる実践が可能であるかを検討するために質問紙調査を行い、その結果を踏まえてワークショップを行った。

2009年にダハチョーク地区で実施したアンケート調査によれば、保護者や地域住民の9割が防災教育を支援することができると回答しており、住民が中心となって継続的な取り組みを実施することができる土壤があると思われた。こうした感触に基づき、2013年3月に簡易雨量計制作ワークショップを実施し、その半年後の2013年9月に現地を訪問したところ、地区内の9集落のうち6集落で雨量観測を継続しており、中にはワークショップに参加しなかった人も雨量計を制作し、雨量観測を行っているという集落もあった。もちろん、雨量観測がたちどころに防災につながる訳ではなく、観測した雨量情報を活かす方策については慎重に検討されねばならないが、住民らが積極的に雨量観測を行っていたことが確認された。

他方で、こうした住民中心の取り組みの促進には限界もあった。それは、一言で言えば、防災実践と日常生活の乖離であった。上述のような、表面的な結果——簡易雨量計の取り組みが半年後も3分の2の集落で継続されていたこと、集落によっては取り組みが拡大していたこと——だけに着目すれば、有意義な取り組みであったと結論づけることも可能であろう。しかし、ダハチョーク地区の住民らは、外部者である筆者の提案に「付き合っただけ」で済ませたのではないかと、とも思われるのである。筆者が成立させたいと思っていた住民による雨量観測という防災実践を成立させるために「付き合っただけ」で済ませたのではなかろうか。住民にとって、外部からやってきた雨量観測については

---

1) 本稿執筆時点の正式国名は、ネパール連邦民主共和国である。

2) 2014年12月1日までは、村 = VDC (Village Development Committee) であったが、12月2日に周辺VDCと合併し、チャンドラギリ市の一部となった。本稿ではダハチョーク地区と表記する。

防災対策は、別段取り組みたいものではなかったのではないかと、思われるのである。こうした筆者の疑念は、取り組みを進める中で頭をもたげてきた。

ダハチョーク地区は、日本のODAとして砂防事業が展開された地区である。当該地区では、さまざまな事業が展開されたが、中でも防災教育の取り組みが有意義であったことが指摘されている<sup>[1]</sup>。しかし、ダハチョーク地区の防災教育の取り組みは、2007年の時点で地区内の3校のうち1校のみが取り組みを継続し、2009年にはいずれの学校でも取り組みを継続していなかったことが筆者の調査で判明している。他方で、ハードウェア対策については、2018年に国土交通省の政務官が現地を訪問し、砂防ダムを視察していることから<sup>[2]</sup>、現在においても有効に活用されていると思われる。砂防ダムのようなハードウェア対策は長期にわたって存続している一方で、防災教育のようなより身近であるはずのソフトウェア対策が早い段階で失われるという状況から、防災実践と日常生活が乖離していると痛感した。防災実践が日常化していれば、日常の一部である学校教育において防災教育が継続していたはずである。筆者の実践よりも遙かに大規模かつ組織的に行われた事例であっても必ずしも地域に根付いていない実態が徐々に明らかとなる中で、住民による雨量観測も長続きはしないように思われた。

他方で、ネパール国を継続的に訪問する中で、住民らが日常生活の中で防災対策を行っているということも明らかになりつつあった。ネパール国においては、2017年まで計画停電を実施しており、特に冬場の状況はひどく、一日の大半が停電しているということも常態化していた。計画停電については、事前にスケジュールが公開されるが、スケジュールにない無計画停電も珍しいことではなかった。また、水についても同様で、間欠給水が日常化しており、水道があっても特定の時間しか使えなかったり、突然、断水したりすることが多い。また、そもそも電気や水道が来ていない地域も多数存在する。こうした状況の中で住民らは、バッテリーや小型のソーラーパネルなどを利用して停電に備えている。トイレなど、灯りがないと困る場所や携帯電話の充電などは、こうしたバッテリーなどを活用している。水道についても同様で、都市部であれば、家の屋根の上に巨大な水タンクを設置し、そこに水を貯めつつ、水道を利用するという家庭が多い。仮に断水してもタンク内の水で当座をしのぐことができるようにするためである。ネパールの人々が日常的に行っているこれらの対策は、日本人である筆者からみれば、立派な防災対策である。日本の防災対策のしおりなどでは、災害時の断水や停電に備えて、水や懐中電灯、電池などを用意しておくことが推奨されている。ネパールでは、多くの人が、断水や停電に備えた対策を行っている。

こうした日常生活に埋め込まれた防災に着目することが、上述した防災実践と日常生活の乖離を乗り越えるための一つの具体的な方法になり得るのではないかと考えられる。すなわち、外部から規範的な防災対策を持ちこみ、そうした対策を防災教育によって実践に結びつけるという標準的なアプローチのみならず、当事者が気づいていないような生活に埋め込まれた防災対策を見出すことも防災上、有意義ではないかと思われる。防災実践を生活に結びつけるのではなく、既に生活に結びついている防災を維持するというアプローチである。なお、防災の分野では、土着の知識に着目されているが（例えば、Kelman et al. (2012)<sup>[3]</sup>やShaw et al. (2009)<sup>[4]</sup>など）、基本的には、これらの主張と本稿の主張は軌を一にするものである。ただし、土着の知識には、当事者らがその存在を防災対策として認識しているものとそうでないものが存在するという点に留意が必要である。ネパールにおけるバッテリーや水タンクなどは、当事者によって防災対策としては、ほとんど認識されていないと思われる。しかし、こうした当事者であっても認識していない防災対策は日常生活に埋め込まれていることから、日常生活そのものが防災対策となっていると考えられる。

こうした日常生活に埋め込まれた防災の重要性を再認識する契機となったのが2015年のネパール地震であった。筆者は、発生から約2ヶ月後の2015年6月に最も人的被害の大きかったシンドパルチョーク郡のメラムチ市とチョータラ市の2つの自治体を訪問した。被災地の状況を目の当たりにして、規範的な防災対策の必要性を唱えても、住民らの多くはそうした対策を取ることができないと思われた。ネパールでは、土造の建物も多く、そうした建物は家族や親戚の協力によって建設されることが多い。材料も河原で石を拾ってきたり、ジャングルから木を切ってきたりして揃えている。そうした人々に実行困難な規範的な対策を伝えるだけでは、耐震性が上がることは期待できず、かえって人々を無力化してしまう危険性すらある。

現実には、こうした人々は、自ら安全と思う方法で家の再建を始めた。2016年3月に筆者が被災地で聞き取りを行ったところ、こうした土造の建物に住んでいた人の多くが、再建計画として平屋にすることと屋根をトタン葺きにすることを計画していた。また、土地を売るなどして、資金繰りをし、鉄筋コンクリート造で再建した人もいる（2018年3月に実施したインタビューによる）。こうした話を聞いた時に、やはり生活の中には復興過程を含む広義の防災の知恵があるのではないかと実感した。被災者がどのように地震災害を乗り越えたのかということをも明らかにすることは、上述の日常生活に埋め込まれた防災の発見と軌を一にする取り組みであると考えられ、そうした調査を継続してきた<sup>[5]</sup>。新型コロナウイルス感染症の影響で、被災後3年目の調査で中断しているが、こうした被災者の復興過程を明らかにすることも、一つの重要な防災支援と言えよう。

### 3. 日本において日常生活に埋め込まれた防災を見出す意義と方法

さて、前節で紹介したネパールにおける状況を踏まえて「日常生活に埋め込まれた防災を見出す」というアプローチは、日本のような科学的な対策が広く行き渡っている国においては不要と考えられる向きもあるかもしれない。しかし、日本においても防災対策と日常生活が乖離しているという問題は生じている。

内閣府が定期的実施している防災に関する世論調査などからも明らかなように、日本で所謂自助や共助と呼ばれるような防災対策が進まないのは、その必要性が理解されていない訳でも、その対策の方法が理解されていない訳でもない。必要性も方法も理解されているが、先延ばしになっていたり、面倒と思われていたりすることがその主因である。したがって防災の専門家が中心となって、規範的な防災対策の必要性や具体的な方法を啓蒙するだけでは防災対策と日常生活との距離は縮まらず、状況は大きくは変わらない。そうした現状に対して、「生活防災」<sup>[6]</sup>や「防災と言わない防災」<sup>[7]</sup>といった、日常生活の中で防災を行うことの必要性が指摘されている。これらは、日常生活の中に防災を取り入れることや日常生活と防災とを関連させることを推奨しており、防災対策と日常生活の乖離が問題であるという問題意識が共有されている。しかし、防災対策として確立している対策を日常生活に関連させるという方向性に加え、日常生活の中に埋め込まれた防災を見出すことも重要ではないかと思われる。

城下（2019）は、防災対策についてその対策の必要性が明らかとなっているか否か、すなわち既知か未知かという軸とその対策を実際に実施しているか否か、すなわち実施済か未実施かという軸の2つの軸で整理している<sup>[8]</sup>（図1）。



		対策	
		実施済 (Done)	未実施 (Undone)
必要性	既知 (Known)	Known-done (既知・実施済)	Known-undone (既知・未実施)
	未知 (Unknown)	Unknown-done (未知・実施済)	Unknown-undone (未知・未実施)

出典) 城下 (2019)<sup>[8]</sup>

図1 防災対策の4分類

一般に、図中左上の状態、必要性が「既知」の対策が「実施済」の状態が望ましいとされる。それゆえ、一般的な防災教育は、図中右上の「既知・未実施」の状況を左上の「既知・実施済」とするための取り組みとして理解される。しかし、この実現は上述のように容易なことではなく、さまざまな方法が提案、実践されている。生活防災や防災と言わない防災において提案されている対策は、例えばローリングストックであったり、祭やスポーツイベントに防災の要素を取り入れたりするといったものであり、この点で、既知・未実施のものを既知・実施済にするためのアプローチの1つとして理解できる。しかし、防災対策の課題には必要性が未知のものも存在する。

必要性が未知の課題は、そもそもその課題を発見することが極めて困難である。多くの場合は、実際に災害に遭遇して事後的に発見されることとなる。実際の災害が発生した際に、ネガティブな結果をもたらしたものが「未知・未実施」、すなわち必要性が事前に分かっていたために対策ができていなかったものとなる。これは想定外と言い換えることも可能である。反対に、ポジティブな結果をもたらせば、それは「未知・実施済」となる。「未知・実施済」の具体例としては、例えば、2014年の新潟県中越地震の際に中山間地の生活様式が結果的に災害対応に役立ったという事例<sup>[6]</sup>などを挙げるができる。

必要性が未知の課題には、ネガティブな結果をもたらす想定外の課題も含まれており、防災の観点からは最小化すべき課題であるといえる。では、こうした必要性が未知の課題を発見するためには何が必要なのか。矢守(2007)は、災害が持つ特徴として、その偶有性を挙げている。災害の特徴とは、不測の事態であるということである<sup>[9]</sup>。未知の課題が災害によって明るみに出るのであれば、災害以外の方法で不測の事態に出会うことができれば、未知の課題を発見できよう。矢守はそれが「他者」とであると指摘する。ネパールにおいて、日常生活に埋め込まれた防災、すなわち未知・実施済の対策が当事者には意識されておらず、筆者には防災対策として立ち現れてきた理由は、まさしく筆者が「他者」であったからではなからうか。そうであるならば、日本社会においても同様に「他者」からは発見されている日常生活に埋め込まれた防災が存在すると考えられる。

#### 4. 泉大津市における日常生活に埋め込まれた防災を見出す取り組み

以上の問題意識に基づき、筆者らは大阪府泉大津市において日常生活に埋め込まれている防災を発見するためのワークショップを実施することとした。今回のワークショップでは、関西大学で学ぶ留学生に「他者」として協力をしてもらった。留学生の視点で日本の日常生活を見つめてもらい、その中から防災を見出すことを試みた。


#### 4.1 ワークショップ概要

今回のワークショップは、表1に示すような内容で実施した。「日本の昔と今を比較～私たちの日常を振り返る～」では、参加者に過去の日本の生活と現在の日本の生活を比較してもらい、便利になったことと引き換えに災害脆弱性が高まったことを確認してもらった。これは、過去の自分自身に「他者」になってもらい、現在の生活を見つめることでもあった。とはいえ、過去の生活に戻ることは、生活水準を引き下げることとなり、賛同は得られにくい。そこで、「他者」による視点の意義を確認してもらった上で、次に生活水準を下げない方法として、生活水準が日本と同程度の国の出身の留学生に「他者」となってもらい、日本の生活を見つめてもらった（日本人から見る日本と外国人から見る日本の比較～留学生の発表～）。留学生には、日本に来て不便と感じたものを事前にリストアップしてもらい、それを当日、発表してもらった。その上でグループワークを行い、日本人の参加者には、リストの中で特に不便だと感じていないものを選択してもらった。さらに留学生にとって不便でなくなるような改善策を提案してもらい、仮に改善策を実現させた場合、災害に強い社会になっているのか否かについて議論してもらった。

表1 ワークショップの内容

9:30～9:35	趣旨説明
9:35～10:00	日本の昔と今を比較～私たちの日常を振り返る～
10:00～10:45	日本人から見る日本と外国人から見る日本の比較～留学生の発表～
10:45～10:55	休憩
10:55～11:30	〈グループワーク〉災害に強いものを見つけ出す
11:30～11:50	各グループの発表
11:50～12:00	まとめ

ワークショップは、2017年1月28日に実施した。それに先立ち、2016年11月に泉大津市危機管理課を訪問し、協力依頼を行った。ワークショップの参加者は泉大津市の広報誌等で広報を行い募った。広報誌の原稿は、筆者らが原案を作り、危機管理課職員に確認をいただき、確定させた（図2）。



泉大津の新しい防災を発見しよう！実は私たちの生活にかかっている！？

## 防災ワークショップ を開催します

1月17日は、「防災とボランティアの日」です。しかし、「防災」と言われても何から手を付ければいいのかわからない、難しい、面倒くさい…と感じていませんか。

そこで、外国人を含めたさまざまな人と一緒に、防災をもっと身近で簡単な取り組みにする方法を考えてみませんか。そして、今の私たちの生活を見つめることで、「新しい防災」を発見しましょう。

**日時** 1月28日(土) 午前9時30分～正午  
**場所** 市役所3階大会議室  
**定員** 先着30人  
**講師** 関西大学社会安全学部 城下英行准教授（泉大津市防災アドバイザー）  
 関西大学社会安全学部 城下ゼミ生  
**申込・問合せ** ファクス（21・0412）、メール（bou\_sai@city.izumiotsu.osaka.jp）で住所・氏名（ふりがな）・電話番号を記入し危機管理課（市役所4階）へ（電話申し込み可 ☎33・9404）

出典)『広報いずみおおつ』2017年1月号、p.8

図2 ワークショップへの参加を募る記事

ワークショップのタイトルは「泉大津の新しい防災を発見しよう！実は私たちの生活にかくれている！？」とした。その後、何度かメール、電話などでやり取りを行い、最終確認を踏まえた打ち合わせは、約1か月前の2016年12月22日に危機管理課の3人の職員と行った。ワークショップ内容の背景や説明、当日の大まかな流れや進め方について最終確認を行った。また、上記の泉大津市への依頼と並行して日本語を話すことができること、日本と同程度の生活水準の国の出身であること、という2つの条件で関西大学国際部に留学生の紹介を依頼した。その結果6人の留学生から応募があり、なるべく出身国の重複を避けるため、5人の留学生（オーストラリア・韓国（2人）・ドイツ・ベルギー）の協力を得ることとした。2017年1月16日に留学生との打ち合わせを行い、当日発表する内容を資料としてまとめてもらうように依頼した。

2017年1月28日に泉大津市役所で開催したワークショップには、男性20人、女性2人の計22人が参加した。年齢構成は、20代の方が1人、40代の方が5人、50代の方が1人、60代の方が4人、70代の方が10人、80代以上の方が1人であった。ワークショップのプログラムは表1に示した通りで、午前9時30分に開始し、正午までの2時間30分とした。なお、参加者22人には、5班（5人班2つと4人班3つ）に分かれて着席いただいた。

#### 4.2 日本の昔と今を比較～私たちの日常を振り返る～

ワークショップは「日本の昔と今を比較」というテーマのもと、「昔と今の生活を比較して一番便利になったと感じるもの」を一人一つずつ考え、それを付箋に記入するという個人ワークから開始した。最初の個人ワークの「昔と今の生活を比較して一番便利になったもの」に関しては、目に見えるものだけではなくシステムや制度、サービスなどといった目に見えないものや防災とは関係のないものまで自由に思いつくままに挙げてもらった。

続けて2つ目の個人ワークとして、1つ目のワークで挙げた「便利になったものがない時、みなさんはどのように生活をしていましたか？」という問いを投げかけた。これについても同様に、考え思いついたものを先程とは異なった色の付箋に記入してもらった。なお、我慢していたなどの回答ではなく、違った行動や手段を書いてもらうようにした。この2つの作業が終わったところで、各個人の付箋の内容を各グループで自己紹介とともに発表してもらう時間を設けた。

このワークの結果としては、一番便利になったと感じるものとして携帯電話などの通信機器やインターネットを挙げた人が8人、電気・ガス・水道などのライフラインを挙げた人が4人、自動車が4人、コンビニエンスストアなどの24時間営業の店が3人、電化製品、ウォシュレットや洋式トイレという回答が各1人であった（表2）。また、携帯電話やインターネットと回答した人の多くがこれらのものがなかった時には、固定電話や手紙の利用、新聞などから情報の入手を行っていたほか、待ち合わせの時にはあらかじめ地図を買う、待ち合わせ時間に遅れないようにするという方法でもって乗り越えていた。同じように、ライフラインを挙げた人は、薪や炭さらにランプなどを活用していた。自動車については、徒歩もしくは自転車でも目的地へ移動していたという結果であった（表2）。

表2 現在と過去の日本の生活を比較した結果

一番便利になったもの	(左列の) 便利なものがない時代は……
スマートフォン	紙の時刻表で調べたり、駅員さんに聞いたり、地図を買って調べたりしていた

薪・炭からガスになったこと	薪・炭を使っていた
ガス	薪で火をおこしていた
コンビニエンスストア（24時間営業）	営業時間を確認して、早めに多く購入していた
24時間営業のコンビニエンスストア	事前に買いだめしていた
スマートフォン（SNSの利用）	待ち合わせに遅れないようにしていた・固定電話がつながるまでかけた
ライフラインの充実（電気・ガス・水道・情報）	少量で、手間をかける
自動車・飛行機	自転車
携帯をはじめとする通信手段	手紙・ハガキ・口伝
車	自転車
電化製品	手作業
車生活	自転車・徒歩
トイレ（ウォシュレット・洋式トイレ）	和式トイレ
電気	ランプ
インターネット	手紙・ハガキ・口伝
インターネット	新聞（本）やテレビからの情報
携帯電話（メール）	固定電話・電報・手紙
24時間物が買える（コンビニ）	約束があり必ず駅で待って、掲示板を使っていた

注）1人が一時退席をしたため、21人分の結果となっている。

この後に「もし、災害が起こった時、災害に強いのは今の生活でしょうか？それとも昔の生活でしょうか？」という問いを發し、災害発生時のことを想像してもらった。その結果、昔の生活の方が今の生活よりも生活の破壊が起こらないため、昔の生活の方が災害に強いのではないかと考えた人が多く見られた。しかし、昔の生活に戻すという提案に対しては賛同を得られなかった。災害時の生活の破壊は現代社会より小さいかもしれないが、いつ起こるかも分からない災害の為に不便な生活はしたくないというのが理由であると思われた。

#### 4.3 日本人から見る日本と外国人から見る日本の比較

次に、生活水準を下げることなく災害に強い日常生活を發見するために、留学生という「他者」に「日本の不便であるところ」を可能な限り發表してもらった。發表では、公共の椅子やごみ箱、水飲み場が少ないことや、トイレに手を拭くようなタオルがないといったものから、クレジットカードを使うことができる店が少ないことや、終電時刻の早さなどが指摘された（表3）。

表3 留学生が日本に来て不便に思ったこと

<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝9時より前に開いている店が少ない</li> <li>・お会計の時、いつも現金で払う（クレジットカードが使えない）</li> <li>・外国のクレジットカードからの引き出しはセブンイレブンだけでできる</li> <li>・メールの内容が難しい日本語や漢字ばかり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的に甘口である</li> <li>・飲食店などで水道の水が提供される</li> <li>・床暖房ではないので、アパートが寒い</li> <li>・左側通行である</li> <li>・牛乳パックをハサミで切ってたたんで捨てる</li> <li>・室内禁煙のところがある</li> </ul>
---	--



<ul style="list-style-type: none"> <li>・紙の書類が多い（用紙などなくしやすい）</li> <li>・駅の地図で、駅名が漢字だけで書いてある</li> <li>・日本人ににらまれる</li> <li>・トイレにタオルがない</li> <li>・トイレの水を流すボタンがどこにあるか分かりにくい</li> <li>・公共のゴミ箱が少ない</li> <li>・公共のイスが少ない</li> <li>・野菜と果物の値段が高い</li> <li>・一人暮らし</li> <li>・銀行口座の申し込み手続きに時間がかかった</li> <li>・日本の銀行カードではインターネットで払えない（Debitカードでない）</li> <li>・夜中のだいたい12時に公共交通機関の電車が止まる</li> <li>・日本で買った携帯電話で外国に電話をかけられない</li> <li>・小判が役に立たない・使えない</li> <li>・横断歩道がややこしい</li> <li>・大阪、梅田のホームにある電車時刻表が分かりにくい</li> <li>・店のメニューが難しい漢字で書いてある</li> <li>・レストランなど飲食店でアレルギーが明記されていない</li> <li>・アレルギーがある方と特別な食生活（Vegan）の人の食事の選択肢が少ない</li> <li>・英語を話せる店員が少ない</li> <li>・銀行ATMでお金を引き出したら、時間によって手数料がかかる</li> <li>・水飲み場が少ない</li> <li>・税別・税込がややこしい</li> <li>・1円玉</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めて地震を体験した</li> <li>・コーヒーなどの飲み物にカフェインの含有量が書かれていない</li> <li>・皮肉なこと</li> <li>・スキンシップがあまりない</li> <li>・電車で電話をしてはいけない</li> <li>・自転車に乗っている人がベルを使わない</li> <li>・規則を厳しく守る</li> <li>・ベルギーと比べると薬が弱い</li> <li>・商品が包装されすぎている</li> <li>・伝統的なトイレ（和式トイレ）</li> <li>・トイレ自動洗浄</li> <li>・服の値段が高い</li> <li>・電車の値段が高い</li> <li>・自転車に乗る時、道が狭くて車や人とぶつかる可能性がある</li> <li>・コンビニやスーパーの営業時間が短い</li> <li>・銀行ATMがあまりない</li> <li>・健康保険料が高い</li> <li>・地震が起こった時の対処法が分からない</li> <li>・スプーンをあまり使わない</li> <li>・禁煙じゃないお店がある</li> <li>・学校の授業が1時間30分もあること</li> <li>・お昼ご飯をみんな大体同じ時間に食べる</li> <li>・電車で食べ物を食べることができない</li> <li>・プラスチックの袋</li> <li>・タバコの煙</li> <li>・鼻を人前でかむことは失礼</li> <li>・夏の冷房は寒く、冬の暖房が暑い</li> <li>・トイレットペーパーが薄い</li> <li>・自転車は歩道で乗る</li> <li>・日本人があまり英語を話せない</li> </ul>
--	--

注) 原文のまま掲載している。

続いて、各グループに表3の内容を拡大印刷したものを1枚ずつ配布し、留学生にとっては不便であるが、参加者にとっては不便だと感じない項目にペンで丸をつけてもらった。丸をする個数に条件はなく、グループで話し合ったものをそのまま反映してもらった。

その次の作業では、グループごとにペンで丸をした項目について、留学生にとって不便でなくなるような改善策を行うとしたらどのようなものが挙げられるかを話し合い、これも付箋に記入してもらった。そしてその付箋をそれぞれその項目の隣に貼ってもらった。なお、改善策については黄色の付箋を用いた。

そして最後の作業として、黄色の付箋に記した改善策を仮に実現させた場合、災害に強い社会になっているのか否かという点を議論してもらった。強くなると考えれば青い付箋にその理由を書き、弱くなると考えれば赤の付箋にそう考えた理由を書いてもらった。青と赤の付箋も拡大印刷した紙に項目ごとに貼ってもらい、一目で理解できるようにした。なお、この作業を進める中で、どちらともいえないような項目も出てきたので、それについて付箋は貼らないようにした。一方で、どちらとも考えられる場合においては、青と赤の両方の付箋に記入し貼ってもらった。

表4は、留学生が不便なものとして挙げた全項目の内、日本人にとっては不便でないと3つ以上のグループで選択された項目をまとめたものである。また、表4の各グループの左側の列には、選ん

	Aグループ		Bグループ		Cグループ		Dグループ		Eグループ	
	改善すると…	災害に強くなる(青) 災害に弱くなる(赤)	改善すると…	災害に強くなる(青) 災害に弱くなる(赤)	改善すると…	災害に強くなる(青) 災害に弱くなる(赤)	改善すると…	災害に強くなる(青) 災害に弱くなる(赤)	改善すると…	災害に強くなる(青) 災害に弱くなる(赤)
・駅の地図で、駅名が漢字だけで書いてある	フリガナをつける 英語をつかう	外国の方も理解できるから(青)	駅名は主要外国語で併記とする	海外からの旅行者などには助かる(青)	多言語表記	外国の人々にも理解してもらえる(青)	メール・IT・グーグルの活用	メールが使えなくなる可能性(赤)	英語などの駅名表記を併記する	
・飲食店などで水道の水が提供される	ミネラルウォーターにする	ミネラルウォーターがなくなるから(赤) 水道が止まってもしばらくの間は大丈夫だから(青)	水質が良いことを説明する		ミネラルウォーター提供	ミネラルウォーターを提供できる(青)	ミネラルウォーターの水を使用	断水の可能性(赤)	ミネラルウォーターを提供するようにする	飲食店に行けば備蓄がある(青)
・左側通行である	右側通行にする		慣れてもらう(頑張ってください！)		慣れてください		右側通行とする		右側通行に変更する	
・電車で電話をしてはいけない	メールにする		通話ができる車両とできない車両を分ける		慣れてください	電話ができなくなる(赤)	やむを得ない時、小声で話す	通信不能・停電(赤)	電話をできるようにする	
・朝9時より前に開いている店が少ない			早く開店する		開いている店を探す		行動パターンの変更		早朝から店を開ける	
・お会計の時、いつも現金で払う(クレジットカードが使えない)			現金払いを了解する	買い物ができなくなる(赤)	お金・カードの両方を使えるようにする	電気がなくても利用できる(青)	小銭入れを保有する	停電で使えなくなる(赤)	全ての店でクレジットカードを使えるようにする	災害時はクレジットカードが使えない(赤)
・初めて地震を体験した			慣れるが第一		体験してください	対応可能になる(青)	慣れること		毎日体験できるようにする	
・電車で食べ物を食べることができない	食べてもいい席をつくる		マナーの問題・衛生の問題なので我慢		○				電車の中でも食べていようにする	
・外国のクレジットカードからの引き出しはセブンイレブンだけでできる					お金・カードの両方を使えるようにする	電気がなくても利用できる(青)	現金を持つ		全ての店でクレジットカードを使えるようにする	災害時はクレジットカードが使えない(赤)
・メールの内容が難しい日本語や漢字ばかり	フリガナをつける 英語をつかう	外国の方も理解できるから(青)					自動翻訳機ソフト使用		英語などでメールを書く	
・トイレにタオルがない					タオル設置	電気がなくても使用できる(青)	ペーパータオルの設置		公衆トイレにタオルを設置する	
・英語を話せる店員が少ない	メニューなど英語で用意 翻訳機を設置する	外国の方も理解できるから(青)	日本の学校で英会話の時間を増やす	海外からの旅行者などには助かる(青)					英語を話せる店員を雇う	
・水飲み場が少ない			日本の習慣なので、飲みたい時は買おう				○		水飲み場を沢山つくる	水の確保がしやすくなる(青)
・牛乳パックをハサミで切ってたんで捨てる					仕組みを変える		牛乳パックをそのまま捨てる		牛乳パックをそのままでも捨てられるようにする	
・スキンシップがあまりない	スキンシップをする		伝統的にスキンシップに慣れたため広めることは無理						スキンシップをとるようにする	助け合いにつながる・親しくなる(青)
・トイレ自動洗浄	自動をやめる(押すまで流さない)	電気が止まると流せないから(青)					機能を失くす	停電・断水(赤)	洗浄を自分でできるようにする	
・学校の授業が1時間30分もあること			きちんと勉強してもらおう				長すぎる		授業時間を短くする	
・お昼ご飯をみんな大体同じ時間に食べること					お昼休みの時間をずらす	いつ食べることができるかわからない(赤)	日本は3度食べることで体のことを考えている		昼食を食べる時間をずらす	

表4 留学生と日本人との間で特に認識の違いが大きかった項目

だ項目がどのようにすれば留学生にとって不便ではなくなるか、その改善策が書かれている。対して右側の列には、最後に作業をしてもらった災害に対する社会の強弱についてそれぞれの理由と共に示している。また、赤い丸で囲まれていたが、改善策が記載されていなかったものに関しては、○印をつけた。○印のない空欄は、そのグループにおいては、ペンで囲まれていなかったもの（＝参加者にとっても不便と感ずるもの）である。

表4をみると、留学生が日本で生活するにあたって不便だと感じた62個の項目の中で、日本人にとっては不便に感じないと5グループが共通して丸をしたものが4項目、4グループが共通して丸をしたものが4項目、3グループ共通して丸をしたものが10項目であったことが分かる。これにより合計で貼られるべき改善策の付箋の枚数は、66枚である。しかし、当日の作業時間が足りなかったこと等の理由から黄色の付箋の枚数は64枚であり、残りの2つに関しては表中で「○」と表記している。また、不便なものを改善した社会で災害が発生した場合、災害に強くなる（青い付箋）と判断されたものが16枚であり、災害に弱くなる（赤い付箋）と判断されたものが11枚であった。これらについても災害に対する社会の強弱について判断できないものは何も付箋を貼らないこととしたこと、時間が足りなかったことなどの理由から、改善策を記した黄色の付箋の数よりも少ない枚数となっている。また、ところどころ、作業の意図が上手く伝わらなかったと思われる付箋も貼られている。

#### 4.4 「他者」によって見出された日本の生活に埋め込まれた防災と取り組むべき課題

まず、留学生が不便に思ったことを改善することによって、災害に対して弱くなるとされた項目について取り上げる。留学生にとって不便でないように改善することで、災害に対して弱くなるとされたことは7項目であった。また、これらの改善策についても示す（表5）。

表5 改善することによって災害に対して弱くなるとされた項目

留学生が不便に思ったこと	改善策	災害に対して弱くなる理由
駅の地図で、駅名が漢字だけで書いてある	メール、IT、グーグルの活用	メールが使えなくなる
飲食店などで水道の水が提供される	ミネラルウォーターにする	ミネラルウォーターがなくなるから
	ミネラルウォーターの水を使用	断水の可能性
電車で電話をしてはいけない	慣れてください	電話ができなくなる
	やむを得ないとき、小声で話す	通信不能、停電
お会計の時、いつも現金で払う（クレジットカードが使えない）	現金払いを了解する	買い物ができなくなる
	小銭入れを保有する	停電で使えなくなる
	全ての店でクレジットカードを使えるようにする	災害時はクレジットカードが使えない
外国のクレジットカードからの引き出しはセブンイレブンだけができる	全ての店でクレジットカードを使えるようにする	災害時はクレジットカードが使えない
トイレ自動洗浄	機能を失くす	停電・断水
お昼ご飯をみんな大体同じ時間に食べる	お昼休みの時間をずらす	いつ食べることができるか分からない

「他者」である留学生から日本の生活を見た時、日本の生活には、例えば、「お会計の時、いつも現金で払う（クレジットカードが使えない）」という不便さが存在している。しかし、こうした不便さは、現在のところ、多くの日本人が不便とは感じていない点である。とはいえ、年々キャッシュレス決済が進み、今後は多くの人々がクレジットカードやキャッシュレス決済が利用できないことに不便さを感じることも予想される。しかし、クレジットカードやキャッシュレス決済は災害には弱い。事実、2018年9月に北海道胆振東部地震が発生し、北海道が全面停電となった際に、この問題が表面化した<sup>[10]</sup>。そして、こうした状況に対して小銭を持っておくことがその対策として提案されているが<sup>[11]</sup>、こうした対策の実効性は疑わしい。それは、日常生活がキャッシュレス化することに伴い、現金を持ち歩くことが純粹に一つの規範的な防災対策となってしまう、日常生活と防災対策が乖離するためである。つまり、現在、その実施が推奨されている規範的な防災対策が、必要性も具体的な方法も分かっているにもかかわらず取り組まれないのと同じ状況となることが予想される。

したがって、「他者」である留学生が主に不便と感じており、かつ、その不便さを解消するための対策を実行することによって、災害時には、その対策が新たな被害の原因となるものが日本の日常生活に埋め込まれている防災、すなわち「未知・実施済」の対策であると言える。そして、キャッシュレス決済の導入に見られるように、こうした「未知・実施済」の対策は、日常生活を便利にする過程で容易に失われてしまうものでもある。

他方で、留学生の不便さを解消する提案をするという作業であったにも関わらず、「慣れて下さい」や「現金払いを了解する」など、留学生の側に変化を求めるような意見も書かれており、ワークショップの作業内容が理解されていないと思われるような意見も見られた。

次に留学生が不便に思ったことを改善することによって、災害に対して強くなるとされた11項目について紹介する（表6）。

表6 改善することによって災害に対して強くなるとされた項目

留学生が不便に思ったこと	改善策	災害に対して強くなる理由
駅の地図で、駅名が漢字だけで書いてある	フリガナをつける、英語をつかう	外国の方も理解できるから
	駅名は主要外国語で併記とする	海外からの旅行者などには助かる
	多言語表記	外国の人々にも理解してもらえる
飲食店などで水道の水が提供される	ミネラルウォーターにする	水道が止まってもしばらくの間は大丈夫だから
	ミネラルウォーター提供	ミネラルウォーターを提供できる
	ミネラルウォーターを提供するようにする	飲食店に行けば備蓄がある
お会計の時、いつも現金で払う（クレジットカードが使えない）	お金・カードの両方を使えるようにする	電気がなくても利用できる
初めて地震を体験した	体験して下さい	対応可能になる
外国のクレジットカードからの引き出しはセブンイレブンだけができる	お金・カードの両方を使えるようにする	電気がなくても利用できる
メールの内容が難しい日本の漢字ばかり	フリガナをつける、英語をつかう	外国の方も理解できるから
トイレにタオルがない	タオル設置	電気がなくても利用できる



英語を話せる店員が少ない	メニューなど英語で用意、翻訳機を設置する	外国の方も理解できるから
	日本の学校で英会話の時間を増やす	海外からの旅行者などには助かる
水飲み場が少ない	水飲み場を沢山つくる	水の確保がしやすくなる
スキンシップがあまりない	スキンシップをとるようにする	助け合いにつながる、親しくなる
トイレ自動洗浄	自動をやめる（押すまで流さない）	電気が止まると流せないから

これら11項目も、先ほどの7項目と同様に留学生から見れば、等しく不便なことである。これらの項目の中には、留学生にとって便利となる対策を行うことによって、災害に対して弱くなるものとして挙げられたものも含まれているが、大半は災害に対して強くなるとだけ考えられていたものである。例えば、「駅の地図で、駅名が漢字だけで書いてある」ことや「メールの内容が難しい日本の漢字ばかり」、「英語を話せる店員が少ない」といった点は、改善することによって災害に対して弱くなる理由が見当たらない。むしろ、災害時要援護者として、こうした人々への支援が必要とされており、積極的に改善すべき点であるといえる。また、「飲食店などで水道の水が提供される」といった点も「ミネラルウォーターにする」ことで、結果的に防災対策で必要とされている水の備蓄につながると言える。こうした、「他者」である留学生が主に不便と感じており、かつ、その不便さを解消するための対策の実行が災害対策となるものは、これまで見過ごされてきた実行すべき防災対策である。その点で、こうした対策は、矢守の言う生活防災<sup>[6]</sup>として取り組むべき課題、すなわち「既知・未実施」の課題でもあったし、日本人にとっては、「未知・未実施」の課題でもあったといえよう。

## 5. おわりに

筆者は、ネパールを長期間にわたり訪問することで、防災対策には、規範的な対策をトップダウンで実施するという方向に加え、市民が意識的にせよ無意識的にせよ日常生活の中で実施している対策を活かすというボトムアップの方向性があり得るという実感を得た。しかし、こうした発想は、ともすれば科学的な対策に比べて劣るものと理解され、さまざまな資源に限りのある途上国においてのみ、次善の策として検討されるべきものと捉えられがちである。確かに、こうした対策は科学的に最善とされる対策に比べればその効果は限定的であろう。他方で、科学や科学技術的な対策は、途上国の生活に根付きにくく、また、科学的な防災対策が進まないのは日本のような所謂先進国であっても同様である。それゆえに日本においても生活防災や防災と言わない防災が提案されているのである。そうであるならば、日本においても市民が日常生活の中で実施している対策を活かすことも、防災を充実化するためには重要であろう。

本研究では、そうした生活の中で実施している防災を発見するために「他者」に着目した。そこでは、留学生の目を通して日本の生活を眺めることで、日々の生活の中にある防災対策を見出すことを試みた。その結果、例えば、「お会計の時、いつも現金で払う（クレジットカードが使えない）」という、防災対策にもつながる日常実践を見出すことができた。加えて、これまで見過ごされてきた取り組むべき防災対策を見出すこともできた。防災対策にもつながる日常実践は失われやすいも

なので、今後は防災の視点からそうした日常実践を維持することの意義を広めていくことも必要であろう。

ワークショップ後に実施したアンケートでは、「今回のワークショップに参加して、みなさんがもっていた『防災』のイメージは変わりましたか?」という問いに対して、22人中20人が「はい」と回答している。また、「これから新たに始められそうな『防災』の取り組みの案があればいくつでもお書きください」という問いに対して、「今日のプログラムの内容について、家でも気軽に団らんの一つとして活用していきたい」、「日常生活の中で常に防災を心掛けていきたい」、「楽しめる防災・気軽な防災」というような、日常生活の中に防災を見出すことを目指すような意見も見られた。規範的な防災対策の方法をトップダウンで伝達するだけではなく、日常生活に埋め込まれた防災を発見し、活かすことも防災を進める上では重要であるし、今回のようなワークショップを通じて、そうしたことを促進することが可能であることが示された結果と言えよう。

今後、こうした取り組みを広く実施していくことが望ましいと考えられるが、いくつかの改善点も見出された。一つは、事後アンケートにも意見が寄せられたが、2時間30分では十分に議論をし尽くすことができなかったという問題である。時間不足のため作業が一部完成しないままに終わることとなってしまった。また、ワークショップ内での作業内容に複雑で考えづらいものがいくつかあった。例えば、留学生が日本に来て不便に思ったことの項目の中から、日本人にとっては不便だと感じないものを選択するという作業である。留学生とは反対の意見を選択していくという作業が複雑さを生み出していたので、「日本人にとっても不便なこと、同感すること」を選択してもらい、選択されずに残ったものについて、その後の作業をしてもらう方が簡単であったと思われる。もう一つは、留学生にとって不便だと感じるものの改善策を考えてもらう際には、「改善策」であるので、「留学生の側に努力（変化）を求めない」というような条件を明確につけるべきであった。「我慢する」や「日本の習慣に合わせる」といった改善策では、現状維持となり、改善策を実行することで災害に強くなるか弱くなるかを実感することができないためである。今回の議論の結果には、一部、混乱の跡が見られたが、こうした混乱も作業の時間的余裕と進行方法の工夫で改善することが期待される。

## 謝辞

泉大津市でのワークショップ開催にあたり泉大津市危機管理課の職員の方々に多大なるご協力をいただきました。参加者募集の広報から当日の会場の運営まで、さまざまにご助力を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。また、ワークショップ開催にあたりまして、参加して下さった泉大津市民のみなさま、協力して下さった留学生のみなさまにおかれましては、貴重なお時間を割いてご参加下さり、どうもありがとうございました。

ネパール国における調査にご協力いただきましたダクタ町のNush Raj Shresthaさん、インタビュー調査や質問紙調査にご協力下さいましたダハチョーク地区のみなさまに感謝申し上げます。また、被災後の大変な中にも関わりませず、複数回のインタビュー調査にご協力くださいましたチョータラ市、メラムチ市のみなさまにも心から御礼申し上げます。

本研究の一部は、2013年度関西大学若手研究者育成経費において、研究課題「発展途上国における持続的な防災体制構築のための実践的研究——ネパール国を事例に——」として研究費を受け、その成果を公表するものです。

## 参考文献

- [1] 比留間雅紀：ネパールでの専門家活動を終えて、SABO、Vol.81、pp.20-24、2005年。
- [2] 国土交通省 Website：【令和元年7月2日】ネパール連邦民主共和国を田中政務官が訪問、[https://www.mlit.go.jp/page/kanbo01\\_hy\\_006998.html](https://www.mlit.go.jp/page/kanbo01_hy_006998.html)、2022年2月20日参照。
- [3] Kelman, I., Mercer, J. and Gaillard J. 2012. Indigenous knowledge and disaster risk reduction, *Geography*, Vol. 97 Issue 1: 12-21.
- [4] Shaw, R., Sharma, A. and Takeuchi, Y. 2009. *Indigenous knowledge and disaster risk reduction: From practice to policy*, Nova Science Pub Inc., 490p.
- [5] Shiroshita, H. 2020. Do Developed Countries Learn DRR from Developing Countries? In: Yamori, K. (ed.) *Disaster Risk Communication. Integrated Disaster Risk Management*. Springer, pp.105-120.
- [6] 矢守克也：〈生活防災〉のすすめ：東日本大震災と日本社会（増補版）、ナカニシヤ出版、107p、2011年。
- [7] 渥美公秀：防災教育をデザインする、自然災害科学、第24巻第4号、pp.350-356、2006年。
- [8] 城下英行：防災教育の実質化に向けた課題、極端気象の予測と防災：科学技術に関する調査プロジェクト報告書、国立国会図書館、pp.47-64、2019年。
- [9] 矢守克也：「終わらない対話」に関する考察、実験社会心理学研究、第46巻第2号、pp.198-210、2007年。
- [10] 北海道震度7地震 キャッシュレス決済、災害に脆さ 停電でカードなど使えず、産経新聞 Website、2018年9月8日。
- [11] 北海道地震から1年 災害に強いキャッシュレス模索 「1年前と状況変わらず」の指摘も、産経新聞 Website、2019年9月6日。

(しろした ひでゆき 関西大学社会安全学部准教授)

(ふじの かよ 関西大学社会安全学部卒業生)

